

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 13 日現在

機関番号：32402

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25380765

研究課題名(和文)「隣る人」の意義 震災・津波災害当事者中・長期的支援法の開発

研究課題名(英文) Significance of "Nestling-Up": Developing a mid- to long-term support method for earthquake and tsunami survivors.

研究代表者

植村 清加 (SAYAKA, UEMURA)

東京国際大学・商学部・講師

研究者番号：30551668

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、文化人類学・社会福祉学・体育測定評価学の研究者/大学教員が、ボランティア活動とフィールドワークを用いた共同研究により、東日本大震災で大津波を経験した岩手県陸前高田市で、人々が被災経験から回復する過程に伴走する中、長期的な支援法を実践的に探った。繰り返し通うことを第一に置き、被災後の地域環境での子どものからだづくりに参与し、被災地間交流の橋渡し等を行った。往来を重ね、被災者・支援者の構図に止まらない関係の変化や、被災経験や地域が抱える課題の変化に直面した。往来と活動の変化のプロセスの詳細な記録を通じて、地域や状況を越えて中・長期的に関わりあう「隣る人」という支援モデルを提示した。

研究成果の概要(英文)：The study aims to develop a mid- to long-term support method for the Great East Japan Earthquake survivors in Rikuzentakata City, Iwate Prefecture in their rehabilitation process. Researchers of cultural anthropology, social welfare, and physical measurement and evaluation studies collaboratively conducted fieldwork integrated with volunteer activities. The priority was given to visit the site repeatedly. During each visit, we took part in improving physical fitness of children in the post-disaster environment.

Repetitively commuting to the site, the relationship between the residents and the researchers exceeded a static sufferer-supporter relationship. We found changes in people's view on post-disaster experiences and challenges that the community faced. We described detailed records on the changes and summarized a support model, "Nestling-Up" Model, in which people mutually develop relationship with one another across communities with different situations in the mid- and long-term.

研究分野：文化人類学

キーワード：東日本大震災 「隣る人」 中・長期的支援 子どもの体力づくり 地域と地域をつなぐ ボランティア協働

1. 研究開始当初の背景

本研究は、東日本大震災・大津波から2年が経過し、中・長期的な支援法が必要な転換期にはじまった。緊急性の高い物理的な支援が重視された発災直後に対し、被災者が主体となり、復興に向けて生きていく力をエンパワーメントし、地域の個別具体性に基づいた長期的な意味での回復過程に伴走すること。そこから当事者を主体にした支援のあり方を実践的に検討する必要があると考えた。

研究代表者の植村清加と共同研究者の村井美紀は、震災後より、勤務先の大学生や周辺地域、知人等の有志とともに、岩手県陸前高田市内の保育園にボランティアとして受け入れてもらい、子どもたちと遊ぶこと、機会あるごとに訪問して、「現状を知る」「忘れない」「他に伝える」というメッセージを現地の人びとに発信してきた。そこでは、ボランティア活動それ自体として「役に立つ」ことよりも、被災当事者の隣にしようとする往来を重ねることを重視した。それは、災害時に即時的に「役に立つ」専門的な技術を持っていただけでなく、むしろ「役に立つ専門的支援者」になることを目的化しないことが、当事者を主体にした回復を保障するのではないかと考えたからだ。当事者によるグリーフ(震災被害の癒し)や過去の整理、時間の経過に伴う被災の意味変化に立ち会うなかで、当事者自らが回復する力をエンパワーメントし、それらを好意的に共有する「隣人」というボランティアの形態が、中・長期的に変容していく関わり合いのなかで、当事者が主体的に回復していくことを支える方法になるのではないかと構想した。

2. 研究の目的

東日本大震災・大津波を経験した人々と地域の中・長期的回復過程に寄り添う「隣人」の実践とそのモデルを構築し、検討する。災害支援と様々な状況の中で立ち上がり、復興に向かう当事者の力をエンパワーメントする方法として、地域と人びとの複数の回復過程にある多様な意味変化に立ち会う「隣人」の可能性と課題を提示する。ひいてはこの過程が、被災からの復興過程に関する民族誌的な知見となり、回復・復興と支援の道筋の多様な在り方に活用されるものとなること。

3. 研究の方法

本研究では、文化人類学、社会福祉学、体育測定評価学という異なる専門領域の研究者/大学教員が、研究会での共同研究はもとより、ボランティア活動とフィールドワークを一体化させた現地での調査活動を共同で

行った。本研究は、ボランティア活動を入口に、その場と状況自体もフィールドワークし、その時々地域・人びとの変化の中での要望や課題を共有する関わり合いのネットワークをつくるものである。

具体的には、人々の被災経験、被災前後の地域の暮らし・環境への働きかけ方の変化と、ボランティア活動の場についてのフィールドワークを文化人類学(植村・田口)が、当事者研究の手法とエンパワーメントの観点からの支援、「持ち場」の質的研究を社会福祉学(村井・坪内)が、保育園をカウンターパートにした幼児の体力測定の実施を、体育測定評価の専門家(大石)が主軸となって担当した。

カウンターパートとの関係を形成しながら、異なる専門領域の研究者がチームとなり、ボランティア活動とフィールドワークを共同で実施し、個々の研究と共同研究での議論を総合的に組み合わせる形で実践的な共同研究を進めた。

4. 研究成果

本研究は、東日本大震災の被災地の一つである岩手県陸前高田市において、被災者・被災地域の中・長期的な回復過程に「隣人」として伴走するボランティア活動の意義と方法を探るものである。専門領域や職場等での個人的資源の異なるメンバーが活動における役割分担と協働フィールドワークを行い、多面的な関係性のなかで個別具体的な地域と人びとの回復の過程・被災地の変容を追い、中・長期的な観点から「隣人」の可能性と課題を整理した。

具体的には、現地でのボランティア活動を、被災県出身であり社会福祉の広いネットワークをもつ村井美紀と幼児の体力測定評価を専門とする大石健二を主軸に組織し、他のメンバーは企画から実施、フィードバックの機会にカウンターパートと活動を媒介し、参与観察等を担った。

村井は、その時々現地の要望に合わせて活動内容を変化させながら、人を連れて通い、変化する被災地の「今」を外の地域に伝え、徐々に、現地でする活動だけでなく、他の場所との関わり合いにつながる活動へ転換した。また、被災県出身であるという自身の立場と関与のあり方を当事者研究の手法を用いて詳細に分析し、「隣り」ことの困難と意義とを検討した。

保育園でのボランティア活動での往来のなかで焦点化された課題が、被災後の地域環境が「子どもたちのからだ」に与える影響についてであった。津波に浸水した区域を避けた保育を行うだけでなく、校庭等が仮設住居になり、復興工事が続くなか、家の環境変化や保育園での生活に欠かせない毎日の散歩が実施できない等が起こっている。生活上の

行動範囲・内容・生活道具や空間が著しく制限ないし変容するなかで、現場の保育士をはじめ保護者から、子どものからだや体力への影響を心配する声が出てきた。そのため、研究開始前に計画していた他地域での被災地支援調査の予定を変更し、幼児のからだづくりプロジェクトを立ち上げた。大石を中心に、幼児の体力測定と保護者アンケートを実施し、子どもたちのからだに関する記録づくりをはじめた。また、他の共同研究メンバーにより地域環境変化や子どもたちのからだに関する保育士の懸念や希望の聞き取りを行った。大石は、現場での継続的なデータ蓄積の元になる資料の作成を行い、保育士に向けて各園の測定データの分析を行った。植村は、「隣る」という実践から、被災地の保育現場の人びとが、単に運動不足の解消ではなく、子どもたちがこの地域で生きていく力に関わるものとして、地域が育む子どもたちのからだを捉えていることや測定項目を日常保育の空間と実践に翻訳しながら、新たな環境下でのからだづくりを行う現場の実践に着目し、測定データのもつ質的な意味を検討した。

並行して、植村と坪内千明・田口亜紗は、往来のなかで新たに知り合った人々や現地NPO、仮設自治会、組合等を訪問し、被災の経験を可能な形で聞き取るとともに、どのように震災前後の暮らしを捉え、新たに作り直していくのかの聞き取りを行った。そのなかで、徐々に「元に戻る」のではなく、震災前から地域にあった課題を乗り越えた新たな地域への再生を目指す人々の声や活動、地域の捉え方に出会うことになった。被災後の時間経過とともに、震災前の地域との連続性と新たな地域の再想像／創造の試みのなかで、今一度、震災後の土地と人びとに「隣る」ことの意味を考える契機となった。その後この点は、植村と村井、田口が主に検討する課題となった。一方坪内は、被災を経験した個人がいかに自らの「持ち場」を捉え、地域の復興と自分の働きを重ねたかを検討した。個々の「持ち場」と地域への想いをもった人びとに「隣る」ことの意味を考えることは支援モデルにおいて不可欠の課題である。

初年度後半からは、すでに2008年から新潟県中越地方での震災と復興に関する民族的調査を行っていた田口の仲介で、植村と田口が中心となり、被災から10年を迎えた中越地域の保育士・自治体関係者、震源地周辺集落の人びと、当時ボランティアとして関わりながら現在まで地域の復興に尽力する人びとを継続的に訪問した。そこから、中・長期的支援に関する経験的な示唆を得るとともに、地域や個々の状況を越えた被災当事者間の直接的交流への橋渡しを構想した。そうした働きかけのなかで、かつて被災した地域の人びとは、他地域から受けた支援の「恩」を今度は自分たちができることで返そうとする態度とともに、被災のフラッシュバック

や被災地間の被害の量と質の違いに対する戸惑い等、被災経験者ゆえの支援と連携の可能性と困難さに関わる課題を学んだ。中越地域との被災地間連携の可能性と課題は、田口が検討している。

「隣る人」とは、支援者視点ではなく現在進行形で変化する当事者の心情に寄り添う視点に転換しながら関わりあうことを表現したものだが、中・長期になる時間の経過や様々な課題のなかで、被災者・支援者という構図のなかだけで「被災地」や「被災」を捉えるのではなく、地方と地域生活者が抱える共通課題とともに、それらを解消していく飛び地的な協働ネットワークの形成が不可欠であるという知見を得た。工事の進展で再度変化する生活環境、災害の経験の伝承と同時に、先のみえない地域復興と人口流出の問題を抱えるなか、改めて震災前から地域にあった問題（学ぶ場、働く場、人口流出の問題）と震災後の地域問題への人びとの対処法（外からきた人との協働への構えなど）に意識を向け、「つなぐ」こととそこから派生する協働的なネットワークの広がりの中で、地域をみる必要がある。こうした研究成果を、活動と変化のプロセスの詳細な記録を通じて「隣る人」をキーワードとした中・長期的支援モデルとして検討しており、2016年度中に1冊の報告書にまとめられる予定である。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 1 件）

村井美紀

「東日本大震災と子ども『隣に居続けること』」『季刊児童養護』Vol.145,NO2:44-47

〔学会発表〕（計 1 件）

大石健二・植村清加

「東日本大震災地域における幼児の運動能力の現状——震災及び津波の被災地域である陸前高田市を対象にして」日本体育学会第65回大会、2014年8月28日、岩手大学

〔図書〕（計 0 件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計 0 件）

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

出願年月日：

国内外の別：

○取得状況（計 0 件）

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

取得年月日：

国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

植村 清加 (SAYAKA UEMURA)

東京国際大学・商学部・講師

研究者番号： 3 0 5 5 1 6 6 8

(2) 研究分担者

村井 美紀 (MIKI MURAI)

東京国際大学・人間社会学部・准教授

研究者番号： 7 0 2 0 2 7 6 0

(3) 研究分担者

大石 健二 (KENJI OHISHI)

日本体育大学・体育学部・准教授

研究者番号： 6 0 5 8 1 4 1 0

(4) 研究分担者

坪内 千明 (CHIAKI TSUBOUCHI)

東洋英和女学院大学・人間科学部・教授

研究者番号： 9 0 2 4 7 0 8 1

(5) 研究協力者

田口 亜紗 (ASA TAGUCHI)

成城大学民俗学研究所・研究員